

日本IT書紀

034 成金

03 未剖篇
卷之四 曙光

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第三十四

成 金

一

第一次大戦は、世界史においては、「帝国主義段階における内部矛盾が世界的規模で爆発した最初の世界戦争」と位置づけられている。

「野口八郎」のペンネームで大著『日本資本主義発達史』を書き上げた経済学者であり弁護士でもあった守屋典郎は次のように記す。

資本主義は二十世紀のはじめまでに帝国主義に発展し、ひとにぎりの先進諸国によって地上人口の圧倒的多数が植民地的抑圧と金融的絞殺をうける世界体制が成立した。しかし帝国主義諸国家の発展の不均等は飛躍的に激しくなつて、国家間あるいは国家群間の対立は激化し、世界戦争への危険が強くなつていった。

大戦の戦後処理を取り決めたのは、パリのベルサイユ宮

殿で結ばれた多国間条約である。史上、「ベルサイユ条約」と呼ばれ、その条約に基づく国際的な枠組みは「ベルサイユ体制」と称される。

その史的評価は次のようである。

一、ヨーロッパ至上主義が崩壊し、太平洋が新しい基軸となった。

一、ロシアに成立した社会主義国家ソビエト連邦が国際政治の転換を促した。

一、アジアにおける日本の勢力伸張が欧米列強から警戒の目で監視されるようになった。

以上の意味で、第一次大戦は「近代史の転換点」に位置づけられている。

だが当時、日本国内でこのことに気がついている人はいなかった。なぜなら日本経済は空前の活況を呈しており、大日本帝国の弥栄（いやさか）を信じて疑わなかったからである。

日本経済が活況を呈した直接の原因は、第一次大戦でヨーロッパの産業界が重大な打撃を受け、各国が生産する製品をアジアやアメリカ合衆国に輸出する余裕がなくなったためだった。なかでもドイツ帝国に依存していた染料や薬

品、化学製品の不足が顕著だった。

その分野の製品にかかる日本の企業に注文が集中した。

おのずから、それまでヨーロッパの企業が大きなシェアを占めていたアジアや南米、アフリカ、オーストラリアなどに、日本製品の輸出が伸びた。ロシアやアメリカからも、毛布や電話機、陶器などが大量に発注された。

例えば革命前のロシア政府からは、軍用毛布千七百六十万ヤードの注文があった。このため日本毛織は全工場で二十四時間の生産を行ったが、それでも受注に追いつかなかった。

同じくロシア政府は、大量の軍用電話機を大倉組に発注した。最初の発注量だけで四万台という膨大なもので、逡信省がこれを日本電気と沖電気工業に二万台ずつを割り当てた。逸見治郎が苦心の末に完成させた孟宗竹の計算尺が輸出されたのもこのときだった。

アメリカからは、ボーン・チャイナが日本に発注された。これはホテルやレストランなど民需用だった。ヨーロッパの陶器メーカーから輸入が激減したため、その代替として日本製の陶器が求められた。

森村組が窓口となり、日本陶器が生産した。白磁の大皿の年間受注量は、最初一万セットだったが、三年後には十万セットを上回った。このために同社はホレリス式統計会

計機械装置を設置して管理業務を行った。

生産地の名を付けた陶器は「オリタケ・チャイナ」と呼ばれ、現今にいたっては「オールド・ノリタケ」として高価で取引されている。

企業の利益率が好況のすごさを物語っている。

一九一四年上期における主要な企業の平均利益率は一四・八%だった。それが二年半後、一九一六年下期には四四・〇%に増加し、ピーク時の一八年下半年は六三・三%に達している。何でも売れ、いくらでも儲かるという時代だった。

この間の貿易収支を見ると、一九一六年に約十二億円だった輸出額は、三年後に約二十一億円に、輸入額は約八億円から約十八億円に急増した。一九一六年から一八年まで三年間の貿易黒字は十三億円に達している。

貿易の急伸で海運業が興隆し、鉱工業、紡績業、木材業、電信・電機業などが軍需で巨利を得た。信じられないほどの富が、驚くほど短時間に個人に集中し、いわゆる「成金」が相次いだ。

二

幸運の神は、「風に乗って駆け抜けていく」といわれる。

その前髪を捉えることができた成りあがり、江戸のころは「梅ノ木分限」「にわか分限」と呼んだ。

「梅ノ木分限」という言葉には、

——梅の木は早く伸びるが大木にならない。

という皮肉な洒落が含まれている。

対置語は「くすのき分限」。

嵐の中に船を漕ぎ出したみかんで成り上がった紀伊国屋文左衛門は、それだけなら「梅ノ木」だったが、のち紀州の材木で上野寛永寺根本中堂の建立を請け負う大商いをやってのけた。

彼は徳川將軍綱吉のお側用人・柳沢吉保に接近して財を成し、吉原で黄金を撒きに撒いた。その豪遊ぶりばかりが喧伝されるが、文左衛門という人は利に聡く、清濁併せ呑む剛腹でもあった。

吉原での豪遊について、彼は、

——このことが江戸市中の暮らしにつながる。

という哲学めいた考えを持っていた。

彼の遊びは、いわば公共事業でもあった。

ただ、吉保に接近しすぎ、貨幣鑄改に関与したことが命取りになった。吉保が失脚し、新井白石が改革に乗り出すとともに没落し、最後は深川八幡近くの寓居で暮した。往時を物語るのは金時絵の椀一つであったと伝えられる。

これに対して「成金」という言葉は、新聞が作り出したらしい。折から将棋ブームだった。

西の坂田三吉、東の関根金次郎が「王将」「名人」の座をめぐって激突し、新聞各紙がこぞつてその話題を取り上げていた。前に一つずつしか進めない「歩」が敵陣に入つて「と金」に成る。庶民には分かりやすい喩えだった。大から小まで「成金」が誕生した。

その先駆をなしたのは相場師「鈴久」こと、鈴木久五郎であろう。

彼は日露戦争の最中、強気一点張りの仕手戦で、あつという間に一千万円の大金を手に入れた。今に直せば三千万円にも相当する。

高給料亭で同時に五つも六つも宴会を開き、畳に撒いた銀貨を仲居女たちに拾わせ、向島の自宅から兜町に通うため、自分と妻、使用人のために四台の二頭だて馬車を注文した。日本に亡命していた孫文を妾宅に招いて十万円を渡し、変革運動の支援者を気取つたりもした。

一九〇七年、「ガラ」がやってきた。株式相場が暴落したのだ。彼は頂点から奈落の底に突き落とされ、孫文が中華民国を樹立したとき、彼は巢鴨の借家で天涯孤独のわび住まいを営んでいたと伝えられる。このあたり、紀伊国屋文左衛門の晩年とよく似ている。

内田信也は一九一五年に三井物産を退社し、兄や知合いから借りまくった二万円を元手にして「内田汽船」を設立した。二百円の家賃が払えなかつたにもかかわらず、八馬汽船が保有していた排水量四千五百トンの船を月四千二百円で借り、これを材木の輸送に月八千円で貸し出した。

内田は儲けた金で手当り次第に船をチャーターし、一方、自らも船を保有して海運を営んだ。その結果、二年後には十六隻の船舶を持ち、横浜に造船所を建設するまでになっていた。

あるとき首相・大隈重信の宴会に招かれた。

——これくらいならオレにもできる。

と考えた彼は、神戸市の須磨に迎賓用の大邸宅を建設した。洋館のほかに五百畳の大広間を備えた迎賓館は「須磨御殿」と称された。

一九二四年（大正十三）、政友会から衆院選に立候補して当選、海軍事務次官、逓信省政務次官を経て岡田啓介内閣で鉄道相、東条英機内閣で農商相を務めた。第二次大戦後、公職追放を受けたが五二年に復帰し衆院議員となり、第五次吉田茂内閣で農林相。なかなかしぶとい人生だった。

神戸に本社を構えた鈴木商店は、台湾の砂糖や樟脳を扱っていたが、大戦で軍が買い込むことを見越して米を買い

占めた。これがために米騒動で焼打ちにあった。総資産は五億六千万円を超え、系列会社は六十に及んだという。のち昭和金融恐慌のとき、渡辺銀行の破綻に連鎖して倒産の憂き目にあった。

その大番頭だった金子直吉は、その最盛時に次のように述べている。

今当店のなしおる計画は、すべて満点の成績にて進みつつあり。お互いに商人としてこの大乱の真中に生まれ、しかも世界的商業に関係せる仕事に従事し得るは無上の光栄とせざるを得ず。すなわちこの戦乱の変遷を利用し、大もうけをなし、三井・三菱を圧倒するか、しからざるも彼らと並んで天下を三分するか。これ鈴木商店全員の理想とするところなり。

彼は個人で鉄を買占め、三億円の資産を築いたと伝えられる。ただ彼の場合は出来星の成金ではなかつた。一八九九年以前に台湾総督・後藤新平と結んで台湾樟脳専売法を成立させて利権を確保し、大日本塩業、日本油脂、帝國麦酒などを創立し、日本製粉、大正生命保険、日本金属、六十五銀行などの設立に関与した。

茨城県で銅山を経営していた久原房之助は、銅の急騰で

大いに儲け、その資産は一億円を超えた。敷地三万五千坪の別邸を神戸市住吉に建設し、落成式には大阪、神戸の芸者を総拳げにして、屋敷の前を通る者にご馳走を振舞った。のち、事業のすべてを義兄・鮎原義介（日産コンツェルン総帥）に譲り、政友会に参加して田中義一内閣で通信相に就いた。

彼は一方では手堅く事業を営み、日立鉱山を設立した。のちに東京電燈会社から小平浪平を電気技師として迎えて鉱山用の電動ポンプを製品化したのがきっかけで、発電機や発動機の総合メーカー「日立製作所」を興すことになる。白石元治郎は浅野商店、東洋汽船を経て、移籍した鉄工所の経営者となった。空前の鉄需要で儲けた金のすべてを会社の資本金に注ぎ込んだ。第一次大戦前に二百万円だった資本金は、大戦が終結した時には八倍の一千六百万円に増大していた。NKK日本鋼管の基盤はこうして固まった。のち白石には「鋼管王」の異名が献じられている。

三

一九一七年八月三十一日付「読売新聞」に次のような記事が載っている。

突如株式の大崩落

不正買占の取締が其の主因 一部成金の肝を寒からしむ馬鹿になって只、買へば可いと称せられてゐた兜町へ三十日の午前嵐のやうな大崩落が襲来して一部成金の肝を寒からしめた。

取引所内はワツと云ふ鯨波の声に等しい雑音と共に各仲買店員が電光の如く飛交ふ有様。

後場は立合を中止。欧州戦争の結果、供給と需用との釣合が保たずに物の相場を吊上げてゐるのも事実だが、大部分に人為的の競り上げが行はれてゐる中で、不正な買占者を嚴重に取締まると云ふ農商務省の省令が九月一日から実施されると云ふことに驚いたのである。成金連が儲けた金が思惑の買占を行つた結果、米雑穀、油、綿糸の主要品に次いで味噌醬油、沢庵、梅干、薪炭の類までも天井知らずに騰貴を告げてきた。

記事中にある「農商務省の省令」というのは、「暴利取締令」のことである。穀類、鉄、石炭、綿糸などを買ひ占め、暴利をむさぼる者には、戒告、三か月以下の懲役または百円以下の罰金を科すというのが、その内容だった。味噌醬油、沢庵、梅干までが高騰したというのは、バブル以外のなものでもない。

- ・ 暗い料亭の玄関を照らすのに十円札に火をつけた。
- ・ 悪くもないのに歯をすべて抜いて金の総入れ歯にした。
- ・ 吸い物の椀を開くと生きたウグイスが飛び出した。
- ・ 節分に銀の粒をまき、芸者に競って拾わせた。
- ・ 田舎の分限者が高価なラヂオを買い込んで株式相場に耳を傾けた。

・ 張り合つて高級料亭を借り上げ大宴会を開いた。

・ 鯛の目玉の周りの肉だけで蒲鉾を作らせ、一人前百円の料理を出させた。

・ 住宅四十八戸を取り壊してそこに東海道五十三次を模した庭を造った。

・ 裾模様には白金とダイヤを使った和服を仕立てた。

・ 指輪、時計、帯留め、櫛、簪は金か白金、そこにダイヤ、寶石をちりばめた。

このような悪趣味かつ愚劣をきわめた伝説を、「成金の時代」は数多く残している。

とはいえこれもまた、時代、であつた。

のちにアメリカのコンピュータ・タビュレーティング・レコーディング（CTR）社からホレリス式統計会計機械を輸入することになる森村商事の森村開作（六代目

市左衛門）も、この景気に乗ってしこたま儲けた一人である。森村については後に詳述する。

補 注

守屋典郎 もりや・ふみお／1907～1996。一九二九年東京帝国大学法学部を出て弁護士となった。三三年共產党に入つて「野口八郎」の筆名で文筆活動を行った。

大倉組 大倉喜八郎(1837～1928)が創業した「和泉橋通藤堂門前自身番向大倉屋」が発展、一八九三年「大倉組」となり、中堅財閥となった。その建設・土木部門「大倉土木組」のちに「大成建設」と改称した。系列会社にはホテルオークラ、帝国ホテル、日清製油、日本無線、日本化学工業、大日本麦酒などがあつた。

紀伊国屋文左衛門 きのくにや・ぶんざえもん／没年について公式な記録は残っていない。豪商・奈良屋茂左衛門と競い、権力中枢の幕府官僚を饗応し利権を拡大した。一七〇八年に十文銭の鑄造を請け負つたが一年余りで通用禁止となり、それがきっかけとなつて家運が傾いた。

若いころは冒険心に富み、決断力と功名心で成り上がったのに対して、晩年の行動が一致しないことから、放蕩と家運衰退の原因を作つたのは二代目文左衛門であるという説もある。山東京伝の『近世奇跡考』(二八〇四)には、享保十九年(一七三四)四月没とある。享年六十六。「帰性融相信士」と戒名し、墓は深川浄等院にある。

坂田三吉 さかた・さんきち／1870～1946。大阪の貧家に生まれたことは確かだが、幼年期のことは伝わっていない。関西将棋界で頭角を現し、一九二五年「名人」を自称して関東将棋

界の関根金次郎と対決した。独自考案した「坂田流向い飛車」はのち関西棋流の本流となった。死後、日本将棋連盟から「名人」「王将」位を贈られている。北条秀司の戯曲『王将』、村田英雄の歌謡曲『王将』および、北島三郎の『歩』などのモデルとなった。

関根金次郎 せきね・きんじろう／1868～1946。千葉県に生まれ、第十一世名人伊藤宗印の門に入り関東将棋界を代表する存在となった。一九二一年第十三世名人となり、坂田三吉の挑戦を受けた。坂田との戦いには勝つたものの、将棋界の近代化の必要性を痛感し、三五年自ら名人位の世襲制を廃止し選手権制への移行を決断した。

鈴木久五郎 すずき・きゅうごろう／1877～1943。ガラ 株式相場の暴落をモノが崩れるときの擬音に喩えた。

内田信也 うちだ・のぶや／1880～1971

八馬汽船 はちうま・きせん・一八六一年八馬兼介(はちうま・かねすけ／1839～1918)が開業した米穀小売商を起点に、一八七八年「西尾丸」という帆船を購入して海運業に転身した。二〇二三年現在、兵庫県神戸市に本社を置き、日本郵船グループに属している。

鈴木商店 武蔵国(埼玉県)川越の下級武士だった鈴木岩次郎(1841～1894)が一八七七年に砂糖・樟脳商として神戸に創業した。岩次郎の死後、妻ヨネ、番頭の金子直吉が製鋼部門にも事業を拡大した。鈴木商店は倒産したが、その傘下にあつたのは播磨造船所(のち石川島播磨重工業)、鳥羽造船所(のち神戸製鋼所)、帝国人造絹糸(帝人)、豊年製油、旭石油、帝国樟脳、信越電力(のち北陸電力)、南朝鮮鉄道、東洋燐寸、帝国汽船、帝国麦酒(サッポロビール)などだった。また金子直吉と並んで番頭を

務めた鈴木岩次郎は、鈴木商店倒産後、日商(日商岩井、のち「双日」と改称)を設立した。

金子直吉 かねこ・なおきち／1866～1944。

久原房之助 くはら・ふさのすけ／1896～1965。第二次

大戦後、A級戦犯容疑で公職追放となった。

鮎原義介 あゆはら・ぎすけ／1880～1967。

白石元治郎 しらいし・もとじろう／1867～1945。

日本IT書紀 034 成金

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。